

総目次

2023年(第1号～第6号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

RCTのその先へ—— 現実世界に応える 介入研究デザインの探求

Dr. Ivo Abraham 特別講演を中心に
(『看護研究』編集室, 企画協力: 坂下玲子)

RCTを超える研究手法の探求——Dr. Ivo Abraham 講演の
概要と意義. 坂下玲子. (1) 10–13.

■講演1

介入が薬物でないとき——複雑な介入を伴う臨床研究の場合. Ivo Abraham/監訳: 坂下玲子. (1) 15–26.

■講演2

RCTが不可能なとき——観察研究での原因と結果の探求.
Ivo Abraham/監訳: 坂下玲子. (1) 27–36.

RCTのその先へ——Practice-Based Evidence (PBE)の発展と
可能性. 坂下玲子, 小野博史, 藤原史博. (1) 41–48.

第2号

若手研究者の活躍に向けて

若手研究者の活躍に向けて——JANSの取り組みを中心に.
仲上豪二郎. (2) 94–101.

■学会における若手研究者支援の取り組み

日本精神科看護協会の取り組み——臨床主導の看護研究を
サポートする. 木戸芳史. (2) 102–105.

日本助産学会若手研究者活躍推進委員会の取り組み——
若手研究者の研究活動の継続を支える工夫. 増澤祐子.
(2) 106–112.

看護理工学会の取り組み——他分野とコラボできる次世代の
育成. 吉田美香子, 桑名健太. (2) 113–121.

■若手研究者のつながりと発信 JANS若手の会エリア・ コーディネーターの活動

北海道: 檜山明子. (2) 123.

東北: 丹野寛大. (2) 123.

北関東: 荻原弘幸, 小西美樹, 金澤悠喜, 竹山美穂, 永井
智子, 松本光寛. (2) 124–125.

南関東: 細野知子, 門脇緑, 小林雅美, 高橋聡明, 椿智博,
橋本友美. (2) 126–127.

甲信越・北陸: 長山豊, 田中浩二, 近田真美子, 飯嶋勇貴,
大橋史弥, 佐藤大介, 亀谷茉莉子. (2) 128–129.

東海: 中西啓介, 橋本佑美, 林文子. (2) 130–131.

関西: 吉川あゆみ, 飯田恵子, 伊東由康, 岡本留美, 野寄
亜矢子, 和辻雄仁. (2) 132–134.

中国・四国: 井上正隆, 入野了士, 金山俊介, 吉丸春香. (2)
135–137.

九州・沖縄: 大城真理子, 村井孝子, 松永由理子, 豊里竹彦.
(2) 138–140.

若手研究者への期待——自身のこれまでのキャリアと経験か
ら. 菅野恵美. (2) 141–143.

看護・助産学分野の若手研究者の研究力向上のために.
新福洋子. (2) 144–148.

第3号

ケアサイエンス

「ケア共同社会」の実現をめざす
学際的アプローチ
(『看護研究』編集室, 企画協力: 西村ユミ)

ケアサイエンスをどう構築していくか——日本学会会議での
議論をもとに. 西村ユミ. (3) 190–200.

N=1に還元するサイエンスとしての看護学研究の視点と
社会実装. 山川みやえ. (3) 202–211.

建築とケアサイエンスの重なるところ. 山田あすか. (3) 212–
223.

科学技術社会論からみたケアサイエンスの可能性. 標葉
隆馬. (3) 224–233.

第4号

日々の医療情報を 研究に活かす

データの2次利用に向けて
(企画: 友滝愛)

既存データを研究目的で利用するときのロードマップを描こ
う!. 友滝愛. (4) 286–301.

データを2次利用する研究を行う際の個人情報保護と倫理的配慮。中田はる佳。(4) 303–310.

訪問看護ステーションにおけるデータの2次利用でどのような研究ができるか。森岡典子。(4) 311–323.

データの2次利用にて重要となる医療統計学的なデータの取り扱い方。中谷英仁。(4) 324–332.

分析可能なデータを抽出するための3つのアプローチ。横田慎一郎。(4) 334–341.

臨床の立場から考える データの2次利用とアカデミアとの連携。岩本大希。(4) 342–346.

第5号

Dr. Cheryl Tatano Beck 特別寄稿

Secondary Qualitative Data Analysis : A Goldmine for Qualitative Researchers

EAFONS 2023 プレコンgressセミナーを踏まえて

Secondary Qualitative Data Analysis : A Goldmine for Qualitative Researchers. Cheryl Tatano Beck. (5) 402–410.

第6号

慢性看護学における事例研究法の進展

1 慢性看護学における事例研究法の取り組み

慢性看護学における事例研究法の特徴と意義。黒江ゆり子、森田夏実。(6) 486–491.

日本慢性看護学会の取り組みのプロセスと成果。木下幸代。(6) 492–495.

2 慢性看護実践における事例研究論文作成の実際と課題

事例研究論文作成を通して見えた課題と研究方法の検討。伊波早苗。(6) 496–500.

事例研究論文の作成プロセスを通して見えてきたこと。東めぐみ。(6) 501–506.

3 論文を作成する

[事例研究指針の開発] 事例研究における指針——研究着手から論文作成まで。東めぐみ、伊波早苗、内田雅子、木下幸代、黒江ゆり子。(6) 508–516.

[分析と記述] 事例研究論文作成のプロセスにおける分析と記述。伊波早苗、東めぐみ、木下幸代、内田雅子。(6) 517–523.

[Topic 1] 事例研究を用いて看護師をどう育成するか。森田夏実、小長谷百絵。(6) 524–527.

[Topic 2] 事例研究論文作成の上で考えておくべき倫理的課題。小長谷百絵。(6) 528–531.

4 論文作成をサポートする

[サポートのあり方と考え方] 事例論文に挑む人への示唆とサポートの留意点。山本力。(6) 532–536.

[サポートの実際・執筆者の立場から] 事例研究論文への挑戦と学び。小野寺恵子。(6) 536–542.

[サポートの実際・サポートする立場から] 事例研究に仕立てる道筋としての事例研究チェックリストの活用とメンバーチェックング。東めぐみ。(6) 543–545.

慢性看護実践における事例研究の可能性。河口てる子、黒江ゆり子、本庄恵子。(6) 546–550.

特別記事

応答の理性について1——一例を扱う質的研究の正当性のために。家高洋。(1) 52–63.

応答の理性について2——一例を扱う質的研究の正当性のために。家高洋。(2) 154–162.

応答の理性について3——一例を扱う質的研究の正当性のために。家高洋。(3) 254–263.

地域と専門分野の垣根を越えて学び合い、新たな可能性を生み出そう！日本看護科学学会主催 オンラインジャーナルクラブの活動。友滝愛、深堀浩樹、松石雄二郎、小笠原絢子、新福洋子、高橋聡明、横田慎一郎、小玉淑巨、仲上豪二郎、大久保暢子。(5) 418–431.

生成系AIが看護研究と臨床看護にもたらすもの——その仕組みと可能性。横田慎一郎。(6) 554–561.

短期連載

JANSpedia

——看護学における学術用語の重要性とその魅力

1 JANSpediaとは？開設の経緯と意義。大久保暢子。(3) 239–246.

看護学学術用語の収集・共有活動の大切さを日本語研究の立場から考える。柏野和佳子。(3) 247–252.

2 JANSpedia開設に至るプロセス。住谷ゆかり。(4) 364–366.

看護学を構成する重要な用語集JANSpediaの構成と利用状況。横田慎一郎。(4) 367–370.

3 新たな学術用語がJANSpediaに掲載されるまで。大村佳代子、大田えりか。(5) 446–448.

用語の審査のプロセス。蜂ヶ崎令子、田中晴佳。(5) 449–452.

まとめ JANSpediaがめざすもの。本庄恵子、藤田佐和、大久保暢子。(5) 453–454.

連載

集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン

28 DNP Prepared Nurseとして、次代のナースを育てる(前). 石田佳奈子. (1) **1-5**.

29 DNP Prepared Nurseとして、次代のナースを育てる(後). 石田佳奈子. (2) **85-89**.

30 長く生きることによって希望をもてる社会を実現するために. 那須佳津美. (3) **181-185**.

31 研究者としてのこれからの生き方. 林文子. (5) **393-397**.

32 楽しく研究しながら、看護学に新たな風を吹かせたい. 金澤悠喜. (6) **477-481**.

若手研究者による若手研究者のための 英語論文執筆のTips

8 若手研究者が英語論文の執筆で取り組んでいること、考えていること——筆者の独自調査から考える. 植木慎悟. (1) **74-80**.

9 国際学術集会に参加する醍醐味. 植木慎悟, 山上優紀, 中山祐一. (2) **170-177**.

10 大学院修了後も英語論文を執筆するモチベーションを保ち続けるためには. 山本瀬奈. (3) **272-278**.

11 〈座談会〉語り合おう英語論文執筆のリアルと本音. 植木慎悟, 山本瀬奈, 古藤雄大, 山上優紀, 大村優華. (4) **378-391**.

特別編 連載の振り返りとまとめ. 植木慎悟. (5) **470-473**.

インターネットと 英語ライティングマニュアルを活用した 英語アカデミックライティングのスキルアップ

4 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識1——文法Ⅰ: 動詞. 江藤裕之. (1) **68-73**.

5 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識2——文法Ⅱ: 代名詞, 文構造. 江藤裕之. (2) **164-169**.

6 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識3——文体Ⅰ. 江藤裕之. (3) **266-270**.

7 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識4——文体Ⅱ. 江藤裕之. (4) **372-377**.

8 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識5——句読法. 江藤裕之. (5) **464-469**.

9 英語論文を「書く」ために必要な実践的知識6——その他の注意事項と文章をより良くする方法. 江藤裕之. (6) **582-590**.

看護実践モデルの構築・評価・改善 ——その方法とプロセス

1 看護実践モデルがなぜ重要なのか. 坂下玲子. (4) **350-353**.

看護実践モデルの構築・評価・改善のステップ. 坂下玲子, 松尾和枝. (4) **354-361**.

2 慢性呼吸器疾患患者の増悪予防のためのセルフモニタリング促進に向けた実践モデルの構築. 森菊子. (5) **456-463**.

3 がん治療後に生じるリンパ浮腫に対してセルフケアを支援する実践モデル——ナーシングリンパドレナージュプログラムの構築. 井沢知子. (6) **572-580**.

Journal Club on Paper II

英論文からリアルワールド・データ解析を どう学ぶか

1 急性期病院における電子データを用いた入院患者のフレイル・リスク・スコアの開発と妥当性: 観察研究 (Gilbert et al., 2018). 河野あゆみ. (5) **434-443**.

2 在宅ホスピスケア利用者に対する看護師の訪問頻度と入院を伴うケア移行の関連 (Phongtankuel et al., 2018). 成瀬昂. (6) **564-570**.